

ジンバブエの青い青い空の下で

あの抜けるような、吸い込まれそうな青い空は健在であった。いつ見ても気持ち晴れ晴れするジンバブエの青い空。どんな時でも失うことのないあのジンバブエ人の底抜けな明るさの源は、きっとこの青空に違いないと感じさせてくれる。

約1年ぶりとなるジンバブエに2月から約2ヶ月間出張する機会を与えられ、今回はその半分以上を首都ハラレからバスで約7時間ほど南に下った人口数万人のアスベスト鉱山の町「ジシャバネ」を拠点としてその周辺を回った。

そのジシャバネは Natural Region ・～・に属する半乾燥地域で年間降水量400~500mmの地域であるが、ジンバブエ国内においては降雨量の特に少ない地域のひとつである。そこに暮らす殆どの人々は天水による穀物生産と家畜飼育を行うために思うような収穫を得ることができないでいる。しかし、なんとかその雨水を確保し、利用するために自分なりに工夫をしている人もいる。そのように様々な工夫・アイデアを用いながら農業を営み、生活している農家を一般的に篤農家と呼ぶが、ここジシャバネ地域においてもその篤農家(=Farmer Innovator と呼ばれている)のおじさん達が少ない雨水をそれぞれの知恵を使ってやりくりしている。(人によっては何十年も前から!)つまり、降雨量が少ないということは天水農業を行う上で様々な制約があるわけで、少ないながらも降った雨水を集め、貯え、効率よく使うことができればその生産性はうんと違って来るわけである。飲料水の確保については、女性の仕事である水汲みも数km離れた先からはるばる運んでくる労苦から解放されるのだ。集水農業=Water Harvest という言葉を彼らは知っていたわけではないけれど、彼ら篤農家は自分の敷地内でそれを当然のごとく実践している。屋根に降った雨水は全て集めてタンクに貯水。地面に降った雨水は傾斜を活用したり溝を掘ったりして畑に導く。浅井戸を設置したり、また地面を掘り土を寄せたりして池を作りダムを作ったりして水を確保することは、辺りの湿気を保つことにもなる。そこに魚を放し養殖することもできる。当然その水は家畜の飲料用にもなる。水があり湿気があるということは、色々な植物が栽培できて家畜が飼えるということであり、農薬を使わず有機農業を行うこともできるということだ。水を集め利用することによって生活及び自然環境の多様性、生産性が増してくるのだ。

欧米人が残していったものを見様見真似で始めて自分の技術とした篤農家もいるが、誰かが手取り足取り教えてくれたわけではないし、教科書があるわけでもなかった。「そういったアイデアはどこから得たのか?」



篤農家のおじさんと手づくりポンプ

という質問に答えてくれたひとりの篤農家は「家族を食わせていかなばならないという危機感と飢えから生まれたのだ。」と言った。やはり、気候や生活環境の厳しい所に住む人々は何かしなければと考える、その必然性から知恵は生み出されるということか。そのような篤農家のおじさん達は、自分達の実践しているそのアイデアを惜しむことなく今まで自信を持って紹介し普及に努めてきたし、そしてこれからも少しでも多くの人にそのアイデアが実践されることを強く願っていた。ただそういった篤農家は歳を重ねた人達ばかりで若い人が少ないのが気がかりであるが… だが今日もジンバブエの青い空の下には、ニカニカと白い歯がこぼれる明るい笑顔の子供達がいる。

(ジンバブエにて: 小島冬樹)